

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

山田浩且・久野正博・柴原浅行・谷水宗美・久保典敬・西川 俊・松尾剛平・岡本楠清

目 的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産総合研究センター国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

方 法

1. 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚げ港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚げ状況を調査した。さらに、浜島, 豊浦, 奈屋浦, 尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を行った。また、昨年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPSロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

2. 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「平成 27 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向、魚体測定調査結果については国際水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告

されるので、ここでは本県所属船の 2015 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1. カツオ漁況

(1) 沿岸曳縄船

2015 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚げ量は 1.6 トンで、前年(49.1 トン)の 3%、過去 10 年平均値(129.8 トン)の 1%にとどまり、主要 4 港で漁獲統計を整備した 1999 年以降、最低の水準となった(図 1)。例年盛漁期となる 4~5 月の極度の不漁に加え、前年 10 月中旬~11 月中旬にみられた戻りカツオによる秋漁も不漁となり、周年にわたってまとまった水揚げがみられなかった。主要 4 港における水揚げ量と水揚げ隻数から求めた年間の平均 CPUE は 43kg/隻と低水準ながら前年並を維持したが、年間の水揚げ隻数は 37 隻と過去にない低い水準となった。水揚げがあった 3 月は銘柄の特大(4kg 以上)、4 月は中小(1.5~2 kg)が主体で漁獲された。

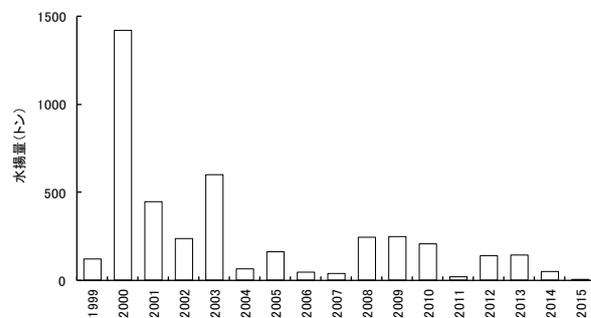


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚げ量(主要 4 港)

(2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2015 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚げ量は 170.4 トンで、前年(272.3 トン)の 63%、過去 10 年平均値(424.0 トン)の 40%と低い水準で推移した(図 2)。三重県所属の小型竿釣船は、4~8 月には伊豆列島北部周辺海域(海徳場, 松生場, スミス島, ハロース周辺)、9~10 月には三宅島~八丈島周辺海域を主漁場とし、主に千葉県勝浦港, 静岡県御前崎港に水揚げしていた。漁業者からの情報によれば、当該海域で 1.5~2kg のカツオを主体に比較的良好な漁況となったもようである。一方で、曳縄同様、熊野灘周辺海域ではほとんど漁場形成がみられなか

った。漁場が遠く、三重県沿岸に帰港、水揚げする漁船が少なかったことも水揚量が伸びなかった要因のひとつと考えられる。三重県主要4港に水揚げされた漁獲物は、4～8月までは銘柄の中小(1.5～2kg)主体に中(2～3kg)、大(2.5～4kg)混じり、9～10月は中～大が主体であった。

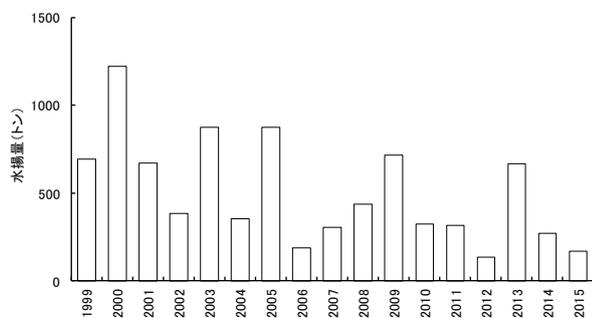


図 2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量 (主要4港)

(2) 中型竿釣船

QRY 情報 (船間無線聴取簿) に基づく 2015 年の三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量は 6,451 トンで、低調であった前年 (5,156 トン) を上回ったものの、過去 10 年平年値 (8,628 トン) の 75%にとどまり、全般に低調な漁況で推移した (図 3)。4 月までは中南海域 (N25°以南) 主体の操業で前年同期および同期の過去 10 年平均値を上回る比較的良好な漁況となった。ここでは銘柄特大 (4kg 以上) の大型個体が漁獲の主体となった。4 月中旬以降 (前年より約 1 ヶ月早い)、漁場の北上が顕著となり、スミス島～ハロース周辺 (30～32°N, 138～141°E) およびそのやや東方海域 (32～33°N, 142～143°E) に主漁場が移った。5 月にはさらに北上し、黒潮前線域 (30～36°N, 140～145°E) に集中した。この頃まで好漁で推移したが、漁場の中心が東北沖に移った 7 月以降は過去 10 年平均値を下回る低調な漁況へと変化した。9 月中旬以降は CPUE が急減し、さらに低調な漁況となり、10 月下旬には当該漁場での操業を打ち切る漁船が相次いだ。10 月の水揚量は、漁獲統計が整理されている 1987 年以降では最低の水準となった。

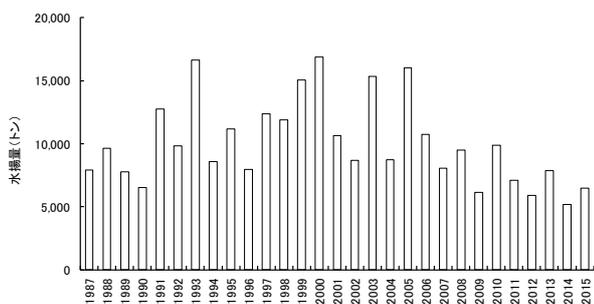


図 3. 三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量

(3) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2015 年の三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量は 7,153 トンで、前年 (9,107 トン) の 79%、過去 10 年平均値 (13,359 トン) の 54%にとどまり、漁獲統計が整理される 1993 年以降、最低の水準となった (図 4)。2006 年以降の水揚量の減少は、三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少 (2005 年: 20 隻, 2006 年: 12 隻) に起因するところが大きい、ここ数年は CPUE (1 日 1 隻あたりの漁獲量) も低水準で推移している。

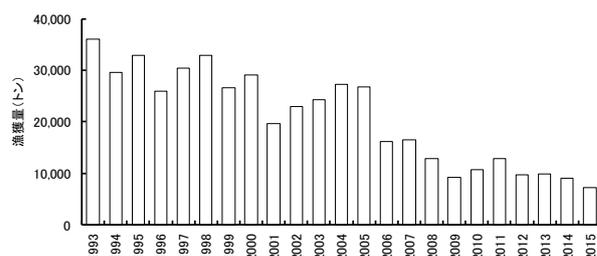


図 4. 三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量

2. ビンナガ漁況

(1) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2015 年の三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量は 3,107 トンで、概ね前年 (3,828 トン)、過去 10 年平均値 (3,303 トン) 並の高い水準を維持した (図 5)。例年、中型竿釣船によるビンナガ漁は、漁場が中南海域から近海漁場へ移行する 5 月上～中旬頃から本格化するが、今季は約 1 ヶ月遅れた 6 月から本格化し、その後 7 月まで好漁が持続した。5 月の漁もようから不漁が心配されたが、結果的には漁期が 1 ヶ月程度遅れた形で前述した水揚量水準を維持した。

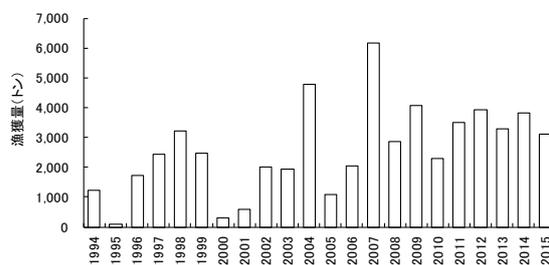


図 5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量

(2) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2015 年の三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量は 1,045 トンで、前年 (3,252 トン)、過去 10 年平均値 (4,340 トン) の水準を大きく下回る低調な漁況で推移し、漁獲統計が整理される 1994 年以降、最

低の水準となった（図 6）。

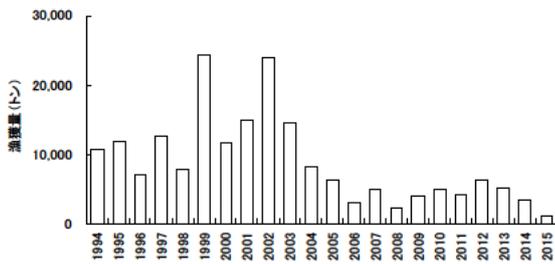


図 6. 三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量

3. クロマグロ漁況

(1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港（和具，浜島，田曾浦，奈屋浦，紀伊長島，尾鷲）における 2015 年のクロマグロ水揚量（全漁業種）は 14 トンで，前年（17 トン），過去 10 年平均値（60 トン）を下回り，低水準で推移する近年の中でも低い水準にとどまった。近年同様，水揚げの主体となった漁業種別は定置網とまき網であり，それぞれクロマグロ総水揚量の 71%，20%を占めた。かつて水揚げの主体を成した沿岸カツオ一本釣や曳縄による水揚げ（主にヨコワを漁獲）は，近年同様，低水準にとどまった。定置網では 4～6 月を中心に体重 30～60kg の中・大型のクロマグロが，まき網では 10～11 月を中心に小型のヨコワ（尾叉長 48～50cm 主体）が漁獲主体となった。

(2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2015 年の養殖種苗用ヨコワ漁（曳縄）は，極めて低調に推移した前年よりは良好であったものの，全般に低調な漁況で推移した。初漁は前年と同じ 7 月 20 日にみられ，9 月 20 日に終漁した。標本漁協所属船によるヨコワの活け込数は，前年の数を上回ったものの，過去 5 年では 2 番目に低い水準となった（図 7 上図）。採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 4.2 尾/隻で，2012 年（4.5 尾/隻），2013 年（4.9 尾/隻）を下回る低水準にとどまった（図 7 下図）。採捕の多くは 7 月下旬～8 月上旬の短期間に集中した。盛漁期の 8 月には尾叉長 20～22cm のヨコワが漁獲主体となった。

関連報文

平成 27 年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書，国立研究開発法人水産総合研究センター。

平成 27 年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括，三重県水産研究所。

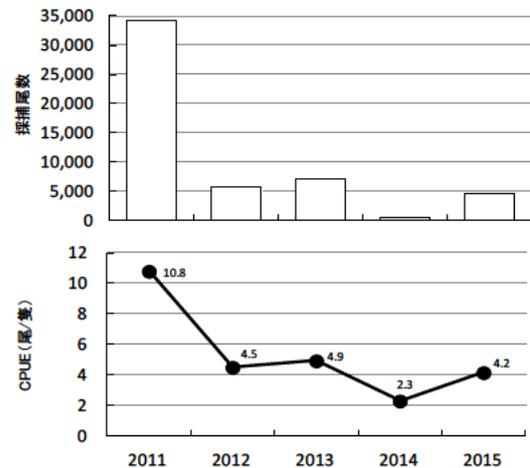


図 7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）採捕尾数および CPUE の経年変化